Toyota City Museum
Of
Local History

豊田市郷土資料館だより

No.93

小原歌舞伎

浅葱繻子地宝船鶴紋　繍　裲襠

紅天鵞絨地雲龍紋　繍　四天

発見館：干支まゆ人形「申」

鋳掛屋の使う道具箱

目次

第26回　全国地芝居サミットinとよた　2
企画展「歌舞伎衣裳の美
～竹本辰美太夫コレクション～」　3
民具調査だより 19－ 鋳掛と焼接　4
重要文化財
旧鈴木家住宅の修理について　5
郷土の文化財を活用した歴史学習をサポート　6
近代の産業とくらし発見館　10年の歩み　7
新収蔵資料紹介２／とよた歴史マイスター　8

ISSN 0919 - 0120
201510　No.93

新豊田市誕生10周年記念事業

第26回 全国地芝居サミットinとよた

「地芝居」というものをご存じでしょうか。地芝居とは、プロの役者が演じる芝居（大歌舞伎など）に対して、「その土地の者によって演じられる芝居。農村などで、秋のとりいれが終わったころ、収穫を祝って、村人たちが行う芝居。」（『精選版　日本国語大辞典』小学館2006）です。江戸時代、歌舞伎は民衆の間で人気を博しました。ただ、地方の農村や漁村では歌舞伎役者を呼ぶ財力はなく、自らの手で演じるようになったのが、地芝居の始まりです。

全国地芝居サミットは、地芝居の伝承されている地域で開催されるイベントで、平成26年11月には新潟県魚沼市で、平成27年5月には東京都あきる野市で開催されました。そして、来る11月28日、29日に、豊田市で開催します。豊田市では、江戸時代から地芝居が盛んに行われ、現在、市指定無形民俗文化財の小原歌舞伎をはじめ、旭・石野・藤岡の4つの歌舞伎保存会が活動しています。

豊田市における町方の歌舞伎としては、享保19年（1734）に挙母祭りの山車上で上演されたのが最も古い記録で、山車上での歌舞伎上演としては全国的にも早いものと言えます。足助八幡宮の祭礼でも山車上で歌舞伎が演じられました。一方、村方の歌舞伎としては、足助地区下国谷で寛政3年（1791）の秋祭りに上演された記録が最も古く、神社境内の舞台で演じられました。江戸時代には三都（江戸・京・大坂）の大芝居以外は原則として禁止され、祭礼奉納を理由に許されていましたが、この禁令は村方に特に厳しいものでした。そのため、舞台を拝殿や籠り堂といった神社の建物と見なすことによって、禁令を逃れようとしたと思われます。このような農村舞台は市内に84棟残り、廃絶したことが確認されるものを含めると141棟にのぼります。市内最古のものは、年代が確認できるものの中では、寛政10年（1798）の棟札を残す西広瀬八剱（やつるぎ）神社の舞台です。小原と藤岡でも江戸時代中期から地芝居の上演が始まりました。明治時代になると、芝居は自由に演じられるようになり、石野・旭でも地芝居が始まり、最盛期を迎えます。ただ、役者鑑札を持たないものが舞台に立つ事は禁止されます。

素人の地芝居の他に、小原・旭・藤岡地区では幕末から、セミプロ集団の「万人講」が活動しました。万人講は、それまでそれぞれの村で演じられていた素人による地芝居の中から芸達者な者が集まって組織されたもので、専業の役者と師弟関係を結び、演技指導を受け、役者鑑札をとって近郷を回りました。素人による地芝居と異なり、上演に際しては依頼主から報酬をもらっていました。小原では明治中期に作られ、メンバーは40～50人に達することもありました。

大正・昭和になっても地芝居は盛んに行われましたが、昭和20～30年代には、娯楽の多様化や過疎化などから地芝居の人気は衰えました。その後、地芝居を地域で伝承していこうとする思いが高まり、昭和の終わりから平成にかけて小原・旭・石野・藤岡で保存会が作られました。

今回の地芝居サミットは、「未来へつなぐ地域の伝承文化」をテーマとし、未来を担う子供たちによる歌舞伎も披露されます。大歌舞伎に負けない迫力の、大歌舞伎とは違った親しみやすい素朴な味わいのある地芝居をご観覧ください。

萩野小学校子供歌舞伎

（山田佳美）

豊田市郷土資料館 企画展

歌舞伎衣裳の美

～竹本辰美太夫コレクション～

演劇・舞踊・音楽の総合芸術と言われる歌舞伎ですが、その一翼を担っているのが衣裳です。歌舞伎衣裳は、その色彩的な美しさや刺繍技術の豪華さで見る人を圧倒するとともに、斬新なデザイン性によって人々を魅了します。また、衣裳は役者が演じる役柄に視覚的効果をもたらす、仕掛けの一つだとも言えます。そのため、江戸時代に人々が着ていたものとは違う部分があるのはもちろんのこと、歌舞伎独特の衣裳もあります。役柄の境遇を表現するための仕掛けや舞台の途中で衣裳を変えるための仕掛けもあり、舞台装置と同様に、衣裳一つで役柄の雰囲気や演出意図を変えることができるのが歌舞伎衣裳なのです。

今回の企画展では、竹本辰美太夫が所有していた衣裳を展示します。辰美太夫が所有していた歌舞伎衣裳は、昭和60年（1985）に当時の藤岡町に寄贈されました。これらは辰美太夫が参加していた市川牡丹一座のものでしたが、解散（大正期）を契機に辰美太夫が譲り受けたものになります。寄贈された衣裳は、小道具なども含めると1,400点以上になり、その中には豪華な刺繍を施した裲襠（かけ）、艶やかな振袖、歌舞伎独特の衣裳である四天（よてん）・小忌衣（おみごろも）など様々なものがあります。これらの衣裳を通して、“歌舞伎衣裳の美”を感じていただきたいと思います。

紫地唐獅子牡丹滝紋　繍　裲襠

○竹本辰美太夫（たけもとたつみだゆう）

竹本辰美太夫は、本名を澤田慎一（さわだしんいち）と言い、明治37年（1904）西加茂郡富貴下村大字下川口（現在の豊田市下川口町）の農家の長男として生まれました。物心がついた頃から三味線が大好きで、近所の大人が弾けない曲もすぐに弾けるようになったといいます。小学校卒業後、現在の瀬戸市で義太夫の師匠をしていた竹本友枝太夫に師事し、昭和3年（1928）頃から、竹本門下の「竹本一幸太夫」として各地で歌舞伎公演をするようになります。昭和9年、長男が生まれた翌年に「竹本操太夫」に改名し、以後人生の転機に芸名を改名しました。昭和11年、当時若手人気一座であった中村扇雀（後の2代目中村鴈治郎）一座の竹本連中として全国を巡業し、芸を磨きました。

戦後、故郷の下川口に帰り、昭和22年に歌舞伎の活動を再開しました（「竹本辰巳太夫」に改名）。戦後間もない時期（昭和22年から30年）は小原・藤岡地区での活動が目立ちますが、蒲郡や岡崎などに呼ばれて公演することもありました。昭和32年以降は、全国的な活躍をしていた市川少女歌舞伎一座などの太夫として、再び各地を巡業するようになります（「竹本辰美太夫」に改名）。辰美太夫は弾き語りのできる太夫として名声を高めました。同時に小原万人講の師匠でもあり、昭和35年に行われた小原万人講の最後となった公演では太夫を務めています。

辰美太夫は歌舞伎だけでなく、藤岡村の村議会議員、文化財保護委員、農業委員などを歴任し、地域の文化や教育の発展に尽くしました。また、晩年は小原村で歌舞伎指導を行い、後継者の育成にも尽力しました。

（伊藤圭一）

会　　期：9月19日（土）～11月29日（日）
※展示替えあり（10月27日（火）から後期展示）
開館時間：9時～17時
休 館 日：月曜日
※ただし、11月23日（月）は開館
会　　場：豊田市郷土資料館第2展示室
入 館 料：無料
ギャラリートーク：11月28日（土）10時から
30分程

直して使う――鋳掛と焼接

大小の坩堝（るつぼ）

最近の私たちの多くは、日々の暮らしの中で「修繕」という言葉をあまり使わなくなったのではないでしょうか。暮らしに不可欠な道具が壊れたり悪くなったりしたら、お金さえ出せばすぐに真新しいものに置き換えることが出来ますので、自身で繕い直すことや修理屋さんに依頼をしてまで、ひとつの道具を使い続けることをしなくなりました。

そんな暮らしの中にあって、とても貴重な民具資料が資料館の収蔵品の中にありますので紹介をしてみたいと思います。

鋳掛屋さんの道具

江戸時代の後期から昭和の30年代にかけて、鍋や釜、薬缶などの破損した箇所を繕ってくれる職人さんがいました。天秤棒で道具を担ぎ、「いかけや～や、いかけ」と声をかけて廻り、修理依頼のあった家の軒下で仕事をする鋳掛屋と呼ばれる出職の職人さんです。またこれとは異なり、家に在って仕事をする居職の鋳掛屋さんもあったようです。

主に鋳鉄製で品質の良くなかった鍋や釜は鬆が入ったりひび割れから穴が開くことが多かったことと、昭和の近代工業以前までは金属類は貴重品であったため、人々は捨てたり、買い替えたりはせず完全に使い物にならなくなるまで、何度も繕いをしながら使い続けました。そんな時代でしたので修繕業者の鋳掛屋さんの仕事が成り立っていたという訳です。

鋳掛屋さんは、長い天秤棒で小さな鞴や道具箱を担いやって来ました。道具箱の中には、火床、坩堝、火箸、鋏、鏝、金槌、砂などが入っています。鋳掛屋さんはこれらの道具を使い、穴の開いた部分に金属を溶かして流し込み、修理をしてくれました。

■道具箱と鞴［豊田市旭郷土資料館収蔵品］0028・29・30
写真左上道具箱：W180 H353 D374、右上：W180 H353 D379
写真下鞴、表・裏：W193 H195 D375

■道具箱［豊田市旭郷土資料館収蔵品］1487
道具箱：W200 H255 D401
居職の道具だと思われます。坩堝と金槌、甲イカの舟があります。舟は型取り用か？

毎日使う大切な鍋や釜ですので、人々は、鋳掛屋さんの廻ってくるのを心待ちにしたそうです。鋳掛屋さんが諸々の道具を担って運ぶために使う天秤棒は、一般的な六尺（180センチ）のものより一尺五寸長く、七尺五寸（約230センチ）もあったと言います。これは江戸の法令で、軒下七尺五寸以下での火の使用が禁じられていたため、軒下の寸法を計るためであったといわれています。諺に“鋳掛屋の天秤棒”があります。これは長い天秤棒の端が荷より長く出ているところから、出しゃばりな人のことを言ったようです。

焼接屋さん

金属類を修繕してくれるのは鋳掛屋さんでしたが、瀬戸物は、やはり棒手振りで廻ってくる焼接ぎ職人が修繕してくれました。江戸の中期までは、割れた瀬戸物は漆でつなぎ合わせていましたが、寛政年間（1789～1800）になると、白玉粉で焼接ぐようになりました。白玉粉は米のそれではなく、いわゆる「鉛ガラス」です。割れた瀬戸物を、鉛ガラスで接着し、さらに接着した部分を高温の炎によって加熱し密着させ、剥離しないように上手に再生してくれました。江戸川柳に『焼き継ぎ屋　夫婦喧嘩の　門に立ち』があります。

（東海民具学会　岡本大三郎）

重要文化財

旧鈴木家住宅の修理について

重要文化財建造物の修理って何をどうするのだろうと疑問に思いませんか？全国に国宝や重文の建造物がありますが、どのようにして保存修理が行われているかあまり知られていません。

文化財建造物の修理は各分野の職人と、修理を監督する保存技術者によってすすめられます。部材や技術を残す「保存」と破損部分を直す「修理」を行っていくのです。

修理工事前には調査を行い、建物の大きさや傷み具合などを調べ、修理の計画を立てます。その後修理に取りかかりますが、重要文化財である建物は、その修理の記録を永遠に残すため、細かい調査や計測が行われ、工事を進めながら膨大な記録が作成されます。

豊田市足助地区にある重要文化財旧鈴木家住宅は平成26年12月から平成28年度末までの第1期修理工事が行われています。旧鈴木家住宅は約1,200坪の敷地に16棟もの建物が建っています。これらを順次修理していきます。

現在行われている第１期工事では主に解体とそれに伴う調査を行っています。工事を行うにあたって、まず素屋根を設置します。素屋根とは修理する建物を覆う建物（屋根）のことをいい、建物を雨風から守り、また作業の足場ともなります。旧鈴木家住宅では敷地の南側の離れ座敷、味噌蔵、門屋の３棟を全解体しました。全解体とは建物のすべての材料をいったん解体し、再び組み立てることをいいます。建物の解体を行いながら、調査も行っていきます。解体前ではわからなかった細部について詳しく調べます。併せて古文書の調査も行いながら、建物がいつ建てられたのか、どのような改造をされてきたかを調べていきます。

今回、瓦をおろしていく中でも新たな発見がありました。おろした瓦に「力石　三定」、「三州　市木　瓦兼」という刻印があるものがみられました。現在では同じ豊田市内であり、さほど遠くない身近な力石や市木といった地域で瓦が焼かれていたことがうかがわれます。

また、建物の母屋に建築年、大工さんの名前が記された墨書がみつかることがあります。今回、事前調査で築年数のわからなかった離れ座敷でも墨書がみつかり、そこに示された年が築年数を示す可能性が出てきました。

このように建物がいつ、どのように建てられたのか、その歴史の一部を垣間見ることができるのです。

また、建物の部材はひとつひとつ丁寧に解体されますが、解体された材料はどこのどの部材なのか番号札がつけられ、再度組み立てる時が来るまで保管されます。壁土も丁寧に解体され、再利用するため保管されます。味噌蔵、門屋の組み立ては５年後の予定です。

この秋からは主屋の半解体が始まっています。半解体とは柱などの建物の下方の骨組みだけ残して解体し、再び組み立てることをいいます。

現在、中馬街道沿いは仮設の足場が組まれ、建物は囲われています。修理が終わったあと、私たちの目の前に再びどのような姿であらわれてくれるのか・・・

弘化三年の棟札

平成32年度一部公開、平成35年度グランドオープンの予定です。再会できる日を楽しみに待っていてください。また、今後、年に数回工事の状況を公開していきます。その際にはぜひ足をお運びください。

（佐林敦子）

郷土学習
スクールサポート

郷土の文化財を活用した歴史学習をサポート

豊田市教育研究会社会部会からの依頼を受け、8月5日、小中学校の教員を対象にした夏季実技研修会(社会科)で、市指定文化財の「長篠合戦図屏風（浦野家旧蔵）」を活用しました。この研修会は、児童生徒により楽しく、よりわかりやすく、より郷土に対する誇りがもてる歴史の授業をつくることをめざして実施されたものです。豊田市郷土資料館所蔵の「長篠合戦図屏風」を会場の高橋コミュニティセンターに移送・展示し、①資料を見つめることから事実を読み解き、思考力・判断力を身につけること、②郷土に残る実物を見つめることで、歴史上の出来事と地域をつなぐ洞察力を高めること、などをねらいに市内に残る文化財の理解と歴史学習での教材化を図りました。文化財課学芸員の解説を交えながら、約130人の参加者が郷土の文化財を学校での授業に生かす方策を模索しました。

以下その内容を紹介します。

長篠合戦図屏風（浦野家旧蔵）

第１部「長篠合戦図屏風」から見つけよう!

はじめに、グループごとに「長篠合戦図屏風（徳川美術館蔵）」の写真を1扇から6扇まで正しく並べる活動をしました。その後、全グループが織田・徳川連合軍と武田軍に分かれて、司会者のクイズ形式による進行で楽しみながら「長篠合戦図屏風」の読み解きをしました。「信長、秀吉、家康の三英傑を探せ」といった基本的な問題から、地元の武将「渡邊守綱を探せ」といった難解な問題まで出されていました。解答後の解説から、戦いの様子がありありと伝わり、参加していた先生方も児童生徒の気持ちになって、真剣に取り組んでいました。

熱心に取り組む参加者のみなさん

第２部 指定文化財「長篠合戦図屏風」登場!!

第２部では、「長篠合戦図屏風（浦野家旧蔵）」の実物を美術品梱包の専門業者が荷解きする様子を目の当たりにすることで、文化財の価値や資料性を学ぶ機会としました。その後間近で見たり、徳川美術館蔵の写真と比較したりして、意見交換をしました。参加者からは、「家康が松に隠れている」「地元の渡邊守綱がよくわかるように描かれている」などの意見が出され、文化財課学芸員が制作時期や制作された背景などをわかりやすく解説しました。

食い入るように屏風を見る参加者のみなさん

第３部 「長篠合戦図屏風」を使った授業の追究

最後に「長篠合戦図屏風」を使った授業づくりを考える活動をしました。Face Timeを使って設楽原現地と屏風絵の比較を映像交信で行ったり、合戦当時の地形を古地図から確認したりすることで、合戦の様子を多面的にとらえ、授業づくりのポイントを確認しました。また、事前にドローンを使って撮影した現地の鳥瞰映像から、信長がいかに地形を利用した布陣で合戦に臨んでいたかを検証しました。そして、異時同図法を使って描かれている屏風絵の意味や実際の地形と屏風絵の類似点や相違点などから、授業づくりのヒントがたくさん示されました。参加者からは、「本物に触れて考える授業をぜひやっていきたい」など、今後につながる感想が多くありました。

豊田市郷土資料館では、文化財を生かした学習を郷土学習スクールサポート事業として展開しています。市内の文化財を活用することで、児童生徒が歴史学習に興味をもつとともに、郷土に対する誇りと愛着を高めることをめざして、これからも魅力ある教材活用を模索していきたいと思っています。

（日高則行）

豊田市近代の産業とくらし発見館

発見館10年の歩み

平成17年11月1日に豊田市郷土資料館の分館として開館した豊田市近代の産業とくらし発見館は、平成27年で開館10周年の節目を迎えました。豊田市域の近代の産業とくらしの歴史を伝える資料館として、常設展・企画展・小学校の校外学習、また、ものづくり講座への参加を通して、この10年で約13万7千人の方に来館していただきました。ありがとうございました。

カイコの取締所だった発見館

発見館は、大正10年(1921)に建設された旧愛知県蚕業取締所第九支所の建物を利用しています。この建物は、豊田市域が養蚕で栄えていた頃を偲ぶことができる、数少ない遺産のひとつとして、また、市域に現存する最古級の鉄筋コンクリート造の建築物として、国の登録文化財となっています。

この建物を活かし、平成17年に誕生したのが、近代の産業やくらしについて学ぶ博物館施設、発見館です。

常設展・企画展・ものづくり講座・「ぶらコロモ」

発見館では、常設展示として養蚕・製糸・鉱業・製瓦業・用水・交通などを中心に自動車産業のまちとして発展する前の豊田市域の近代産業について、また、昭和30年代の茶の間の再現やくらしの道具などを展示しています。

そして、年３回、豊田市内の近代の歴史を掘り起こし、再発見する企画展を開催しています。春は「まゆまつり」と題して、毎年テーマを変え養蚕・製糸の街だった歴史を伝えようと、実際にカイコを飼って展示しています。平成24年度企画展で紹介した「金山揚水」や平成25年度の「町有飛行機・挙母号」のように、今聞き取り調査をしなくては消えてしまう近代の歴史を掘り起こし紹介することを心がけて企画展を行っています。このほか、まゆ工作やガラ紡糸を使ったコースター作りをはじめとする講座や、企画展に関連した見学会、地図を片手に街なかで挙母の歴史を発見する「ぶらコロモ」なども開催しています。

10年間に発見館で開催した企画展

平成18年度　「市域の瓦展　いぶしの輝き」、「くらしの中のクルマのかたち」、「宇都宮三郎　最初の近代技術者になったサムライ」、「ガラ紡・綿と糸がつなぐ世界」

平成19年度　「加茂蚕糸　大煙突の下で」、「とよた「駅」物語　三河鉄道が運んだ人・モノ・思い」、「水神になった商人西澤真蔵　枝下用水にめぐる思い」

平成20年度　「猿投山ろくのトロミル水車　石粉のふるさとを訪ねて」、「橋のある風景　矢作川をわたる」、「尾三バス、走る！浦野謙朗と愛知県下初のバス会社」

平成21年度　「まゆまつり　カイコの一生と養蚕」、「喜一郎と寿一　とよた誕生秘話」、「しもやま　森の恵み　近代からのぞく下山」

平成22年度　「まゆまつり　カイコと道具」、「とよたに電燈が灯った日　電力の源　矢作川」、「挙母駅90年の軌跡ととよたの街」

平成23年度　「まゆまつり　蚕業取締所とカイコ」、「百々貯木場と今井善六」、「白瀬矗～夢の南極大陸～」

平成24年度　「まゆまつり　在りし日の養蚕農家」、「地図に名を遺した人たち　とよたの近代を拓く」、「待望の水、水路を走る　竣工100周年を迎える近代化遺産・金山揚水」

平成25年度　「まゆまつり　カイコのひみつ」、「われらの飛行機・挙母号　衣ヶ原飛行場とその時代」、「古い道具と昔のくらし　明治の発明品」、「あれから10年　名鉄三河線廃線区間写真展」

平成26年度　「まゆまつり　蚕種製造所のしごと」、「車のまち　とよた　豊田英二の生きた100年」、「明治・大正・昭和・平成まちなかの変遷」

平成27年度　「まゆまつり　加茂蚕糸～繭から糸へ」、10周年記念企画展「古橋源六郎暉皃」

発見館では、11月1日まで10周年記念企画展「古橋源六郎暉皃（てるのり）」を開催し、安倍首相の所信表明演説でも取り上げられた、幕末に現在の豊田市稲武町で活躍した偉人、古橋源六郎暉皃について紹介しています。是非、ご来館ください。

おわりに

歴史ある建物を後世まで大切に伝えるためにも、これからも多くの方に楽しみつつ学んでいただける発見館を目指してスタッフ一同努力してまいります。

（豊田市近代の産業とくらし発見館　小西恭子）

新収蔵資料紹介 -2

伸子針（しんしばり）

着物は、どのようにして洗っていたのでしょう。絹織物などの上等な着物は、糸をほどいて布の状態にして洗っていました。そこで活躍するのが、伸子という細い竹の棒です。洗い終わった布の両端を張り手と言う板で挟んで空中に張り、伸子の両端についた針を布の端に軽く刺し、弓のように曲げて布をぴんと広げます。伸子は５cmくらいの間隔で刺し渡していきます。そして、布の裏側に洗濯のりをぬり乾かします。乾いたら伸子をとって縫い直したら完成です。

写真の伸子は江戸時代末に創業した老舗の呉服屋さんから寄贈いただきましたが、戦前には一般の家庭でも使用していました。

平成 27 年 12 月 19 日から開催する企画展「作って、直して、着る ～古い道具と昔のくらし～」では、この伸子針をはじめ、足踏み式ミシン、衣服の雛型、炭火アイロンなど、衣服の制作・手入れに関わる道具を展示します。

伸子針

張り手

めずらしい「衿志んし針」

マイスター活動

「とよた歴史マイスター」大活躍！

豊田市の歴史・文化財について学び、伝えていく「とよた歴史マイスター」。第１期募集に集まった参加者は、基礎講座（６月）を受講し、マイスターとして認定後、活動を開始しました。

古い道具と昔のくらしを郷土資料館に体験しにくる小学生の見学サポート、７月～８月に開催した企画展「この夏キミは考古学者になる」の展示案内や「夏休みこども月間 2015」の講座などで、大活躍されました。

マイスター活動への参加者を受付けています。

○申込方法　専用申込書をご提出ください。

※郷土資料館・交流館などで配布。郷土資料館 HP にも掲載中。

※活動開始は、基礎講座（毎年６月と 11 月に開催）受講・認定後です。

■利用案内■

開館時間　9：00～17：00
休 館 日　毎週月曜日（祝祭日は開館）
入 館 料　無料（特別展開催中は有料）
交通案内　名鉄「梅坪駅」より南へ　徒歩 10 分
名鉄「豊田市駅」より北へ　徒歩 15 分
愛知環状線「新豊田駅」より　徒歩 15 分
とよたおいでんバス「陣中町一丁目」より西へ　徒歩５分
駐 車 場　約 20 台

●豊田市郷土資料館だより　No.93
平成 27 年 10 月 22 日発行
編集・発行　豊田市郷土資料館
〒471- 0079 豊田市陣中町１－21
TEL.0565-32-6561　FAX.0565-34-0095
E-mail● rekihaku@city.toyota.aichi.jp
URL● http://www.toyota-rekihaku.com

※豊田市郷土資料館だよりは、HP でもご覧いただけます。